

## 姉妹都市交流派遣事業に参加して

生出 真美

ハンフォード市への派遣事業に幸運にも参加することが許された。いざ参加することが決まったのだが、私は英語を全く話せないので、5日間もホームステイ！しかも、2日間はホストファミリーと過ごすことになっている。大丈夫だろうか。。と楽しいはずの旅行前は不安な気持ちで一杯だった。

瀬棚商業高校の協力で英会話講習や成人団の団結会などで、次第に気持ちも高まってきた。しかし、出発まで仕事や子ども達の学校のことなどで忙しく過ごしていたので、本当にハンフォードに行くのだろうか？ハンフォードへ行くのは夢かもしれない！と思いながら出発の日を迎えた。瀬棚から離れていくごとに、英語が話せない不安も無くなり、どんな旅になるかと楽しみの気持ちが大きくなった。

10月11日から20日まで、現実の生活を離れて、アメリカ・カリフォルニア州を満喫してきた。

ハンフォードの人たちの温かいおもてなし、とびっきりの笑顔、初めてみる景色、見渡す限りの平らの土地、ジェットヒター並みの太陽の日差し、ジャンボサイズの食べもの、などなど。10日間でたくさんの貴重な経験ができた。

私の反省点は、ハンフォードに行く前にホストファミリーと連絡していなかったことだ。ホストファミリーのことをよりよく知っておくと、さらにホームステイが楽しくなったと思う。

そして、英語をもっと勉強しておくべきだったと反省した。思ったことを伝えられずに歯がゆい思いをした。

これからでも遅くないので、英語を勉強したい。ハンフォードの人たちが瀬棚に来たときには、会話ができるようになっていたい。

今回の訪問で、アメリカと日本のそれぞれの良いところを改めて感じる事ができた。

この旅行は、せたな町の方々、ハンフォードの姉妹都市委員会の皆様、通訳の三浦さん、ホストファミリーとそれにつながる人たち、旅行会社の森さん、一緒に旅をしてくださったみなさん、たくさんの方々のおかげで素晴らしいものになった。心より感謝いたします。ありがとうございます。

### < 出会い >

今回の旅行での一番の収穫はたくさんの人たちとの出会いだった。

まず、ホストファミリーとの出会い。

ミゲル家のお父さんギルバートは消防士。お母さんマリリンはメガネ店のドクター。息子(三男)のパトリックは16歳の高校生。長男は結婚して独立して、次男は大学進学のため遠くにいるとのこと。

ギルバートはいつでも私に明るくひょうきんに話しかけてくれた。ドライブに連れて行ってもらって、私が興味を示したところで、車を止めて写真を写してくれた。

マリリンは明るくおしゃべり好きなお母さん。ダウンタウンの街を案内してくれたり、私の買い物にもつきあってくれた。そして、マリリンの作るブラウニーは甘さ控えめで美味しかった。パトリックは、プーマをこよなく愛しているとのことで、私がお土産持って行ったプーマを真似た「KUMA」のキーホルダーを気に入ってくれた。一緒に折り紙を折って、お別れの日には鶴をプレゼントしてくれた。

ギルバートはパトリックの水球 (Water Polo) の試合にも連れて行ってくれた。アメリカの女子高生の応援は覇気があって、アメリカに来ている！という気持ちが強くなった。夕方6時ぐらいでも太陽の日差しは強かった。

ミゲル家では私のためにお休みを取ってくれたり、部屋を用意してくれたり、英語を日本語に翻訳できるアプリを用意してくれた。いつでも明るく話しかけてくれた。本当に感謝だった。

マリリンは私にいろんな人に会わせてくれた。

マリリンのお友達のリックとキャサリンご夫妻のお宅にもお邪魔した。

キャサリンは日本の文化が大好きとのことで、浴衣を持っていた。浴衣を着つけてあげたら、とても喜んではいった。キャサリンのお宅で、三人でバックを作った。二つ作って私にプレゼントしてくれた。そして、その日の夕食は、キャサリンとマリリンと私で太巻きずしを作った。アメリカでは太巻きは「カリフォルニアロール」とよばれていた。

またご主人のリックは牛グッズを集めている方で、リビングに牛の置物がたくさん飾ってあった。私が牛飼いだというと、牛の話をしてくれたり、リックが中国へ行った時の牧場のカタログや写真をみせてくれた。

また、航空ショーに行くとき、マリリンのお友達のキーマン (瀬棚高校の鷲野君のホストファミリーのママ) とも出会った。キーマンはベトナム出身で、保育所でサブの先生をされている方。キーマンは私がいかに暑そうにしているのか、日陰を探してくれた。そこでしばらく涼んでいると楽になった。キーマンのやさしい気持ちが嬉しかった。片言ながら、キーマンといろいろとお話できた。来年、息子が瀬棚に行くので、ぜひホストファミリーになってほしいとお願いされた。私も来年は彼を受け入れよう！と思った。

田川尚美さんとの出会いも印象的だった。

尚美さんは日系2世の方で、92歳！実際の年よりもずっと若くみえ、おしゃれなおばあちゃん。それに、もっと驚くのは現役のクリーニング店の店主だということ。

姉妹都市委員のフクダさんからホームパーティに招かれた時、尚美さんは第2次世界大戦中に、アメリカ在住の日本人が強制収容所に入れられていた時の資料をたくさん持ってきてくれた。

私はその事実を知らなかったのだから、衝撃だった。アメリカで仕事をして生活していたのに、ある日突然、強制収容所に連れて行かれたとのこと。そこでの暮らしはとてつもないものだった。尚美さんの親せきの方が描かれた絵が本になっていた。その絵をみていたら、胸がいっぱいになって涙が流れていた。もっと詳しく話をききたかった。

尚美さんはパーティできゅうりの酢の物を持ってきてくれた。私は一口食べて、母の事を思い出

した。母が作ったきゅうりの酢の物の味と同じだったからだ。おいしくて独り占めしたいくらいだった。尚美さんは私がハンフォードから発つ時も、見送りに来てくれた。

ダウンタウンのお店でも、心に残る出会いがあった。

リボンのアクセサリー店の方と話していたら、Niiyama（新山）さんという男の方が来た。彼は日系3世とのことで少し日本語を話せるけれど恥ずかしがって、日本語は「便所」と「かわや」しか話してくれなかった。私は片言の英語で、Niiyamaさんは片言の日本語で、なんだか可笑しい気持ちになった。

絵画を売っているお店にも入った。日本風の絵が飾られていた。アメリカでは鯉と亀が人気のようで、それらの絵が多くあった。お店の方とマリリンが話をしていた。私は2人が何を言っているのかはあまり理解できなかったけれど、子どもの事を話しているようだった。たぶん初対面であろうその2人が涙目になりながら話していた。国は違っても、子どもの事を思うのはどこも同じなのだと感じ心が温かくなった。私は英語を話せず、その会話に加われず残念だった。

ハンフォードの姉妹都市委員会の方たちには、何日間もハンフォードを案内してくれ、感謝だった。

以前に、瀬棚に来てくれた方々との再会もあった。

お別れのときは、また会いたい！ありがとう！の気持ちが極まり、涙なくしてさよならはできなかった。

#### <食べ物>

私は15年前にハワイへ行った時、美味しい食べ物に出会わなかった（観光地だから仕方がないのか??）。だから、今回も食べ物には期待していなかった。

しかし、私の予想に反して、食べ物はおいしかった。調味料が口にあわないものもあったが、素材そのものが美味しくて、どれもおいしくいただいた。量の多さには馴染めず、残念ながら残すことが多かった。特にフルーツとソーセージがおいしかった。ホームステイの最後の夜に食べたアイスクリームは大きくて驚いた。途中で寒くなって震えてしまったので、最後まで食べられなかった。とても美味しかったので残してしまい、残念だった。

牛乳もヨーグルトもお米もジャガイモも美味しく、これらのものが関税なしに安い価格で日本に入ってきたら、日本の農業はとても太刀打ちできないと感じた。私は、身近で採れるものを食べるのが一番体に良いと思っているので、

飛行機で何時間もかかる場所からの食べ物を食べ続けても健康は守れるのか？と心配にもなった。

#### <ハンフォード観光>

姉妹都市委員会の方たちには、いろんなところを案内してもらった。

クルミ、アーモンド、ピスタチオ農園。

ピスタチオの収穫作業を見学させてもらった。2台の機械で効率よく作業していた。

クルミなどが木になっているところは見たことが無かったので、新鮮だった。

ピスタチオ工場。

ピスタチオを加工する工場にもお邪魔した。大きな工場で、100人もの人が働いているとのこと。

オートメーション化された工場で、ピスタチオがあちこちに移動していた。

ブラボーフーム。

チーズ工房。チェダーチーズはチャンピオンになったのとのこと。何種類ものチーズを試食させてくれた。いろんな味のピスタチオが売っていた。外にはツリーハウスもあり、見ているだけで楽しい気持ちになれた。

タチパレス&カジノ

インディアン居留地にあり、インディアンが経営しているホテルとカジノ。

かつてインディアンに強制移住させたことを忘れないためにも、税金をかけないなど優遇しているようだ。

そのホテルでは、各部屋を案内してもらった。ホールや各部屋にはインディアンの写真や絵が飾ってあった。

カジノでは10\$のサービス券がもらえた。やり方もよくわからず気が付いたらゼロになっていて、お金持ちになって帰国するという夢はあっけなく消えた。

かぼちゃの大砲

デントコーン畑の片隅にかぼちゃの大砲とデントコーンの迷路があった。

農家が副業でやっているのかもしれない。

かぼちゃの大砲は一回2ドルだった。やってみるとおもしろかった。

新聞社

仕事が分業化されていて、たくさんの人たちの手によって新聞ができることを知った。

市役所

市役所には姉妹都市交流でプレゼントされたものがたくさん飾ってあった。玄関にはひな人形が飾ってあった。アメリカでみる日本はとても美しく感じた。

その他、郷土館や大規模酪農場にも訪問した。

< 写真 >

今回、いくつかの職場にお邪魔させてもらったが、どこの会社でも、家族写真が飾ってあった。また、ダウンタウンの絵画店では娘さんの写真をいつでも取り出せる場所に忍ばせていた。働く上で、一番支えになるのは家族の存在なのだと改めて感じた。私も職場に家族写真を飾ることを見習いたい。

また、ミゲル家でも家族写真がセンスよく飾られていた。キーマンも家族の写真を入れたケースを持ち歩いていて、私に家族写真をみせてくれた。

< 航空ショー >

航空ショーで、私は泣いてしまった。何故かというと、飛行機が打ったミサイルが目の前に落ちて炎を上げたからだ。

他の人たちはそれをみて喜ぶように大興奮していたが、私はただただ怖かった。

すごい爆音で飛行機が飛んでいた時も、子どもが泣き叫んでいた。それでも、ブルーエンジェルの飛行の時は、ブルーエンジェルの魅力にすっかりはまってしまった。

#### < ウェルカムパーティ >

たくさんの料理を用意して下さって、高校生の踊りや歌などの出し物があり楽しい時間だった。鵜入さんのハーモニカは会場が一つになるほどの盛り上がりだった。

#### < 気候と農業 >

今回の旅行で一度も雨が降らなかった。日差しはとても強いし暑いのだが、空気が乾燥しているので汗はあまりかかなかった。

ハンフォードは中心街を離れると、周りは広大な農地だった。コットンやキウイやレーズン、ナッツ類、レタス、牛用のコーン、アルファルファ（牧草）が栽培されていた。トラクターの多くはジョンディア製のものだった。畑の隅々まで水が潤うように、灌漑用水が発達していた。見渡す限りの広大な乾いた大地を潤すためにどれだけの費用が掛かっているのかを考えるとゾッとするが、アメリカの偉大さも感じた。牧草地にも入らせてもらったが、カラカラに乾いた良い乾草ができていた。この気候の中、牛飼いができるのは羨ましかった。

大規模な酪農場が多かった。すぐ近くでコーンが採れるし、牧草も質の良いものが大量に作られていた。日本の牛は輸入のコーンを食べているので、新鮮なコーンを食べられる牛をうらやましく思った。牛舎は壁が無く屋根だけで簡単なものだった。餌の貯蔵場所も簡易な施設の中に大量に保管されていた。湿気かびる心配は無いのだろう。牛の飼養面でも効率を重視していた。搾乳は専門の方が手際よく行っていた。1万5千頭もいると24時間搾乳をしているのかもしれない。

日本でも効率を重視して大規模農場を作っているが、とてもカリフォルニアの酪農場には近づけるものではないと強く感じた。

アメリカの酪農業と比べると、私はのんびりとした牛飼いだということを知った。これから厳しい情勢になれば、より効率重視の経営にしていけないと生活ができないかもしれない。それでも、牛それぞれの性格を知りながらの牛飼いを続けていきたい。

#### < サンフランシスコとロサンゼルス >

今回はサンフランシスコとロサンゼルスの市内観光やディズニーランドにも行った。

サンフランシスコは坂の街で、中心街は華やかな場所だった。その中で、老婆が片手にゴミ袋を手にして、街のあちこちに置いてあるゴミ箱を目指してギラギラとした目つきで歩いていた。私はその人に申し訳ない気持ちになった。多すぎる食べ物を残していたからだ。その人のことを忘れてはいけないと思った。

ミゲル家と尚美さん



尚美さんと沢山の資料



キャサリン



かぼちゃの大砲



水球の試合



アルファルファ畑



驚きの大きさのアイスクリーム



パトリックとキーマン



ブルーエンジェルの飛行



ウェルカムパーティ



ミゲル家のリビング



大規模酪農場



太巻きづくり



バック作り



ミゲル家のお庭

